

サー・アンドラーシュ・シフのプログラム冊子におきまして、プログラムノート中にブラームス「8つのピアノ小品」op.76 の解説文が記載されておりませんでした。

謹んでお詫び申し上げます。

以下が当該曲の解説文となります。

ブラームス：8つのピアノ小品 op.76

短い小品を中心としたブラームスの後期ピアノ創作の始まりに位置する op. 76 の作曲は、早期稿が 1871 年まで遡れる第 1 番を別として、1878 年夏のペルチャハ滞在中に集中する。作品は翌年 2 巻に分けてジムロック社から出版された。全 8 曲は、持続的なリズムが特徴的で速度の速い《カプリッチョ》と、抒情的で比較的緩徐な《インテルメッツォ》が半数ずつ、また調性もそれぞれ長短調を 2 曲ずつと実にバランスよく構成されている。

作曲法については、《カプリッチョ》がバロック時代を振り返るような伝統的作曲法、《インテルメッツォ》がより個性化され動機的関連を活用した 19 世紀の作曲法に依拠し、曲のコンセプトに応じ表題が区別されたと考えられている。

所々に見られるシューマンやショパンなど先人の作品との動機的関連も作曲家の歴史意識の現れと捉えられている。特に op. 76 第 1 番の冒頭楽想に続く対位的な部分の四音音列（嬰ハ-ニ-嬰ヘ-嬰ホ）には、モーツァルトの交響曲第 41 番「ジュピター」の終楽章フーガや J.S.バッハの《平均律クラヴィーア曲集》第 2 巻のホ長調フーガなどとの繋がりが指摘され、書法と動機のこの二重の関連は作曲家が巨匠の作品を真摯に見つめる姿を思わせる。

丸山 瑤子(音楽学)